日蓮正宗

教学小辞典

創価学会教学部編

創 価 学 会

原殿御書……三六〇
熱原法難……三六一
提婆達多……三六四
阿育大王……三六五
竜樹・天親……三六七
天台大師……三七〇
妙楽大師……三七三
伝教大師……三七四
日目上人……三七五
日有上人……三七七
日寛上人……三七七
六巻抄……三七八
四条金吾頼基……三八二
池上兄弟……三八四
南条時光……三八五
富木常忍……三八七
阿仏房……三九〇
日蓮宗一致派……三九一
本門法華宗（旧八品派）および仏立宗等……三九七
顕本法華宗……四〇一
法華宗……四〇三
旧本門宗……四〇五
立正佼成会……四〇七
孝道教団……四一三
砂村問答……四一四
霑志問答……四一六
小樽問答……四一七

第七編　古今の思想哲学の説明と批判

九十五派のバラモン……四二〇
儒教……四三

ユダヤ教……四二四
キリスト教……四二六
イスラム教……四二八
ヒンズー教……四三一
演繹法と帰納法……四三三
性善説と性悪説……四三五
唯物論と唯心論……四三七
実存哲学……四三九
プラグマティズム（実用主義）……四四一
唯物弁証法……四四三
科学と宗教……四四五
価値論……四四九

第七編　古今の思想哲学の説明と批判

【九十五派のバラモン】

紀元前一五〇〇年ごろ、中央アジア方面から現在のインド人の先祖であるアーリア人が、インドに侵入しはじめた。彼らは、先住民族のドラヴィダ人などを征服して奴隷となし、農牧生活を営んだ。彼らの宗教は、すべての自然現象を神とみる多神教で、当時神々に祈った呪文を集めたものが、リグ・ヴェーダである。

その後、祭祀を専門とするバラモン（僧族）が出現し、バラモン教を発展させた。

ヴィシヌ、シヴァ、ブラーフマの三神を信仰し、祈りと難行苦行の修養とによって業と輪廻とから解脱し、涅槃の境地に達しうると説いた。ヴェーダも、リグ・ヴェーダのほかに、サーマ・ヴェーダ、ヤジュール・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダができ、それらを中心に独特な宗教が展開した。その終極のものはウパニシャッド哲学であるといわれる。

これは、ヴェーダの哲学ともいえるもので、多年にわたってでき上がり、いろいろな説が取り入れられているので、かならずしも一貫してはいないが、大ざっぱにみて、その根幹をなすのは梵我一如の説、宇宙創造説、輪廻および解脱説などである。

梵我一如というのは、宇宙の本体を梵（ブラーマン）人間の本質を我（アートマン）とし、両者の関係を追究して梵と我は一如であるとする説である。

この梵や我の本質は、無限大にして無限小であり、空間および運動を超越していると説いて、これを常住・

永遠・不生・不滅・不老・不死などと呼んで、変化を否定している。
また、宇宙創造説では、太初には唯一無二の「有」があって、それが創造繁殖の欲望を起こして、「火」「水」「食」などを生み出し、「有」はそれぞれに「生命なる我」としてはいり、それらを複雑化して、この世界を創造したという説である。
また、人間を中心とした生類は、今世のみで滅することなく、過去より現在、現在より未来へと再生を続けると説くのが輪廻説である。そしてそれからの脱却を解脱といったのである。
また、これらの説の究極を、因果という面からみれば、因中有果（人生の苦しみや幸福は因果が一体である）の説、因中無果（因と果は別個なもので、人生の幸・不幸は自然のものであるからあきらめようとする）の説、この二説を合わせた因中亦有果・亦無果の説に立て分けることができる。
そして、これらの説の実践として、実に非合理な修行をしたのである。それについて日蓮大聖人は次のように示されている。
開目抄上（一八七ページ）　各各・自師の義をうけて堅く執するゆへに或は冬寒に一日に三度・恒河に浴し或は髪をぬき或は巌に身をなげ或は身を火にあぶり或は五処をやく或は裸形或は馬を多く殺せば福をう或は草木をやき或は一切の木を礼す、此等の邪義其の数をしらず。
これらバラモン哲学を体系づけた学派は、ミーマーンサー、ベーダーンタ、サーンキャ、ヨーガ、バイシェーシカ、ニャーヤ等である。
その邪見は、九十五派（九十六派ともいわれる）の支流を生み、常に争い合い、釈尊出世の当時まで盛んだ

ったのである。

釈尊は、これらの因果の理法を説かない低級なバラモン哲学を打ち破り、九十五派に分かれていた思想界を仏法に統一せしめたのである。

しかして、釈尊によって徹底的に破折されたバラモン教は、インドで仏教が衰えると、再び復活してきた。現在のヒンズー教（インド教）がそれである。

その後、インドにイスラム教が侵入し、インド教徒とイスラム教徒とはことごとに相争い、そのため英国に難なく占領される破目となったのである。インド独立に際しても、ついに両教徒は国を分かち、インド（インド教徒）とパキスタン（イスラム教徒）の二国が成立したのである。

開目抄上（一八七ページ）に詳しい。

【儒教】

総じては、中国古来の思想、別しては、孔子・孟子の流れをいう。「修身、斉家、治国、平天下」の言葉もあるように、道徳を重んじ平和な社会を築こうとしたもの。

孔子は紀元前五世紀の人で、仁、義、礼や忠孝の道を説き門弟三千人といわれた。その言行は「論語」として残っている。後に数々の派に分かれ、孟子が性善説を唱え、荀子は性悪説を説いて対立した。

孔子と同じころ、老子は無為自然の道を説き、欲望を去ることが大切であるとした。

日蓮大聖人は、開目抄上（一八六ページ）のなかで、

此等の聖人に三墳・五典・三史等の三千余巻の書あり、其の所詮は三玄をいでず三玄とは一には有の玄・周公等此れを立つ、二には無の玄・老子等・三には亦有亦無等・荘子が玄これなり、玄とは黒なり父母・未生・已前をたづぬれば或は元気よりして生じ或は貴賤・苦楽・是非・得失等は皆自然等云云。かくのごとく巧に立つといえども・いまだ過去・未来を一分もしらず玄とは黒なり幽なりかるがゆへに玄という但現在計りしれるにたり、現在にをひて仁義を制して身をまほり国を安んず此に相違すれば族をほろぼし家を亡ぼす等という、此等の賢聖の人人は聖人なりといえども過去を・しらざること凡夫の背を見ず・未来を・かがみざること盲人の前をみざるがごとし……過去未来をしらざれば父母・主君・師匠の後世をもたすけず不知恩の者なり・まことの賢聖にあらず、孔子が此の土に賢聖なし西方に仏図という者あり此聖人なりといゐて外典を仏法の初門となせしこれなり。

と述べられ、三世にわたる生命観を知らず、ただ現在ばかり少し知ったような儒教を低級なりと断定されると共に、実はこの儒教は仏法の初門であったことを示されている。

さて、儒教は宋時代にはいって朱子学や陽明学となって発展したが、これが日本にわたって来てかなりの影響を与えたことは見のがせない、鎌倉幕府を倒した建武の中興、また徳川幕府を倒した明治維新には、思想的背景として朱子学があった。しかし、これらの革命が決して長続きせず、かえって日本を不幸にしたのは周知のとおりである。

徳川時代には、幕府の保護のもとで発展したが、その結果は日本の思想界の低級化をもたらしたのである。

親孝行ということにしても、ただ親のいうことに従うのが親孝行であると単純に決められてしまった。

しかし日蓮大聖人は、こと仏法に関しては、大きい立ち場から孝を説き、また法華経のかたきになる親にはつかないのがかえって真の親孝行であると示されている。

兵衛志殿御返事（一〇九一ページ）　法華経のかたきになる親に随いて一乗の行者なる兄をすてば親の孝養となりなんや、せんするところひとすぢにをもひ切って兄と同じく仏道をなり給へ。

一昨日御書（一八三ページ）　世を安じ国を安ずるを忠と為し孝と為す。

【ユダヤ教】

旧約聖書を聖典とするユダヤ人の民族宗教。

ユダヤ教の起源は前一三世紀末頃、エジプト王の圧制を受けていたユダヤ人をエジプトから脱出させるのに指導的役割りを果たしたモーゼが、エホバを全世界の創造主として全人類を支配する唯一絶対の神とし、十戒を説いてその信仰を中心にユダヤ人の結束を図ったことに求められる。

ユダヤ教が成立したのは、前六世紀後半、ユダヤ人がバビロン捕囚から解放されてパレスチナに帰国し、エルサレムに神殿を建設し、厳格な律法のもとにエホバへの忠誠を誓ったときである。ユダヤ人には、この律法を有するのはユダヤ民族だけであるから、ユダヤ民族こそエホバから選ばれエホバと特殊な契約を結んだ選民であるという選民思想が生まれた。この思想は、亡国のため流浪の生活を強いられ、絶えず迫害の危機にさら

されていたユダヤ人の、民族的独立を守るための精神的なささえとなった。

ユダヤ教は、はじめエルサレムの神殿を中心とした祭司宗教的な性格をおびていたが、パレスチナを離れて各地に離散したユダヤ人が増加するにしたがって、彼らの間にシナゴーグ（教会堂）が設立され、シナゴーグを中心とした共同体組織がつくられるようになった。紀元二世紀にユダヤ人がローマから徹底的に鎮圧され、エルサレムに出入りすることすら禁じられるにいたってからは、もっぱらシナゴーグを中心とした教団組織で信仰が続けられた。その教団には礼拝儀式をつかさどる律法学者がおかれ、ユダヤ暦によって信仰の行事が行なわれ、週一回の安息日には、一切の労働を休んで一日を祈禱で過ごした。

ユダヤ教の教義の特色の第一は、徹底した一神教である。第二は律法主義である。最も重要とされているのはモーゼの十戒であるが、旧約聖書全体を律法としている。ユダヤ人の日常生活は律法の規定にしたがって行なわれているが、律法に詳細な解釈が加えられて、安息日の規定、祈禱の規定等、数多くの規定が設けられるようになり、ユダヤ人の日常生活はこれらにしばられて固定化していった。イエスはこのような繁雑な律法中心主義に基づく信仰生活を批判して、新しい信仰（キリスト教）を唱えたのであるが、ユダヤ教の遺産を多く受け継いでいるのである。第三は選民思想である。これは他民族との同化を防ぎユダヤ民族の独自性を保持するのに役立った。第四は終末観である。前三世紀頃、ユダヤ人の間に、自分たちの敬虔な信仰にもかかわらず、神よりのむくいがいっこうに現われないという懐疑思想が起こった。これに対する解答として現われたのが終末観である。これは、人間が支配する現世ではユダヤ教徒の希求する恵まれた世界はこないとし、この世の終わりに、ユダヤ人の中からメシア（救世主）が現われ、彼の統率のもとにユダヤが世界を征服し、神の審

判によって諸民族の不義が裁かれ、神の国が実現するという思想である。

キリスト教ではイエスをメシアとするが、ユダヤ教では僭称者として磔刑を求めている。ユダヤ教の終末観はユダヤ人の統一国家実現という政治目的に根拠を与えることになり、一九世紀のシオニズム運動も、そのあらわれであるとされている。

ユダヤ教は唯一絶対神による天地創造説を立てているが、これは因果の理法を無視した観念論的な思想である。また厳格な戒律主義は人間性を抑圧した低級な実践方式である。唯一絶対神を掲げて選民思想を鼓吹したことは、ユダヤ民族の結束と独自性を保持するのには役立ったが、ユダヤ民族が亡国の悲惨を経験して、二千年にわたる流浪と迫害の生活を強いられたことは、このようなユダヤ教の教義や思想があまりにも低級かつ独善的、排他的であったことに、根本的な原因がある。

【キリスト教】

ユダヤ民族には、もともと旧約聖書を中心とするユダヤ教があった。彼らは神がこの天地を創造したと信じ、また人間の先祖であるアダムとイブが原罪をおかして楽園を追放されたと信じていた。そして、彼らの予言者たちは救世主キリストの出現を予言していた。

しかし、エルサレムに出現したイエス・キリストの説くところはユダヤ人の期待に背き、イエスは最初から迫害を受けた。そして最後に、十二人の弟子のなかのユダの裏切りによって、十字架にかけられて死ぬ。

その後、ペテロやパウロらの熱烈な布教によって、キリスト教はしだいに当時のローマ帝国内に弘まり、ローマ帝国の崩壊にともなって、北方のゲルマン民族のなかで信奉され、ついに中世のキリスト教世界をもたらしたのである。

その後、ルネッサンス（文芸復興）のころローマ・カトリック教会の腐敗堕落は目にあまるものとなり、免罪符の発行を攻撃して立ち上がったマルチン・ルターの宗教改革により、旧教と新教とが対立することとなった。

その後アジア方面にも布教の努力がされたが、現在では、その教義は近代の科学的批判に耐えることができず、唯物論などにも押され、欧米においても急速に衰えつつある。

その教義は「旧約聖書」と、弟子たちによるキリストの言行録である「新約聖書」に基づき、ギリシャの哲学者プラトンやアリストテレスの思想を取り入れて形成したものである。

まず第一にキリスト教は、唯一絶対神がすべてを造ったと説く。そして神とは、全智全能、完全であり、愛であり、善である等といっているが、その神の実体、存在の因果などはまったく明かされていない。もし本当に、完全な神が人間を造ったとすると、生まれながらの不平等や、一生不幸の宿命に泣く人々の存在など、説明できないことになる。

また、不幸の原因は、アダムとイブがおかした原罪によるとして、人はみな生まれながらに罪人だと決定している。それを消すために告白という形の懺悔をさせるのである。

また、キリスト教で説く愛にしても「汝の敵を愛せよ」という言葉は、理解はできるが、実践不可能な無理

な注文である。そのように叫ぶキリスト教徒自身、絶えず争いを繰り返してきた現実をどう説明するのであろうか。さらにその説くところの生命論は、処女懐胎、キリストの復活、昇天、さらに天国の問題等、どれをとってみても矛盾だらけであり、非科学的なものである。

キリスト教が、西欧の世界におよぼした影響は測り知れないものがある。あらゆる歴史のかげに絶えずキリスト教があったといっても決して過言ではない。宗教的な戦争だけをみても、十字軍、フランスのユグノー戦争、アメリカの独立戦争等々、さらに文学、美術、音楽、建築、学問をはじめ、一般社会生活に与えた影響は多大である。しかしそれが、科学の進歩を遅らせた原因ともなっているのである。

わが国においては、四百年も前に伝えられながら、少しも弘まっていない。これは、宗教の五綱の原理からいっても当然なことであろう。

現在では、社会事業等を盛んに行ない、宗教本来の姿を忘れ去っている。

【イスラム教】

アラビアの予言者マホメット（西紀五七〇年頃～六三二年）を開祖とする宗教で、その開祖の名をとってマホメット教といわれ、また、回教、フイフイ教などとも呼ばれる。仏教、キリスト教とならんで世界三大宗教の一つ。仏教が東洋に、キリスト教が西洋に、特殊な文化の花を開かせたのに対し、回教は、両者の中間地域にアラビア文化と結合して、特殊な色彩の文化をみせた。

イスラム教の教理は、大きく信仰と儀礼に分けられる。

信仰は六信よりなる。六信とは神、天使、経典、予言者、来世、天命に対する信仰をいい、このうち中心になるものは神・アラーに対する信仰である。イスラム教は顕著な一神教で、全智全能にして無始無終の神であり、天地の創造主であるアラーのほかには、一切の神を認めず、マホメットはその使徒と認められるにすぎない。人間はこの神を画像、木像などに表現できないとしているので、イスラム寺院（モスク）の中心となるものは、聖地メッカに向かう壁につくられた切り込み（壁龕）があるだけで、神像というものはない。六信の中の天使は神と人間の媒介者としての立ち場を占め、信仰にとっては付属的な意味しかない。経典には、モーゼの五書、ダビデの詩論などがあるが、最も完全なものはコーランである。予言者についてもいろいろあるが、真のアラーの使徒である予言者はマホメットとされる。来世については、死の天使に生前の信仰の有無をとわれ、生前の行ないによって極楽か地獄の応報をうけるが、ただし、アラーの神に祈りを続けていけば、その慈悲に浴して、善人も悪人も共に一切の人間は救済されるとしている。また、この世の一切の出来事は、神意によるものとし、人間の意思というものは、神意のゆるす範囲内で自由であるという信仰である。

イスラム教徒が実行すべき宗教上の儀礼のなかでも特に重要なものを五つあげ「イスラムの五柱」と呼んでいる。この五柱についてはやや異説があるが、礼拝、施物、斎戒、朝勤の四つと、他の一つを念真とするものと聖戦とするものとがある。礼拝は毎日五回、夜明け、正午すぎ、日没前、日没直後および夜に行ない、これが宗教生活の根本となっている。信徒はだれでもどこにいても、そこが清浄でさえあれば礼拝を行なえるが、必ずメッカのカバ神殿の方向に向かって行なわなければならない。特に金曜日（安息日）の正午の礼拝に

は全身を清め、晴れ着をつけて、所在のモスクに集まって集団礼拝を行なうのが本義になっている。

斎戒とは断食のことで、マホメットが天啓に接した回教暦九月に一か月間、日の出から日没まで飲食を断って身を慎み、アラーの大慈に包まれる行である。

施物は税金のようなもので、全信者がだいたい年収の四十分の一ぐらいにあたる物か金を教団に義務的に納める。本来の意味はアラーに預けたことになっているわけであるが、実際は、教団において貧しい人々、奴隷の解放、聖戦への軍備、有益な施設、公共の事業その他の慈善事業などに使用されていた。

朝勤、いわゆる巡礼は、メッカ（マホメットの生地）への巡礼で、イスラム教徒は、世界のどこにいてもメッカ参りを一生の願いとしている。毎年一回の大祭に参加すれば、「ハッジー」と自称し、世間から尊重される。聖戦は異教徒、不信の徒との戦いで、コーランのなかにも繰り返し「アラーの道において戦う」と鼓舞している。そのために命をささげたものは、最後の審判の日には、必ず天国に迎えられるとされている。そして、アラーの前では、身分や階級の差も民族や国境の区別もなく、まったく平等の「教友」として結合さるべきであるとするのがこの教えの本義である。

イスラム教は、〝コーランか剣か〟をスローガンとする不信徒征服の布教活動、アラーの前では身分や階級の無差別を説く平等主義の教理などが背景となり、これに教徒の人口の増加も加わって、世界三大宗教の一つにまで発展した。

現在では中近東地域ばかりでなく、中国やインドシナ、インドネシアにも多数の教徒がおり、またアフリカでは、北から中部に向かって、原住民のあいだにも弘まりつつあり、教徒数は世界中に約三億ないし、四億と

称せられている。

しかし、これは、人道的な理想を唱えるだけで、真に宗教本来の使命である、人間の幸福をつかむ方法を説いていない。

生命における因果の道理を無視した教理とそれに基づく人間性を無視した形式化した儀礼とが、イスラム教徒を近代文明の進歩から、大きく取り残させる要因となったことは否定できない。また布教のためには、流血をも辞さない戦争を聖戦と称していることなど、生命の尊厳を無視した低い宗教の証拠である。

【ヒンズー教】

インド教のこと。インドにおいてバラモン教に原住民の民間信仰を取り入れ、そのうえに、仏教やジャイナ教の影響をうけながらしだいに形成されたのが、この宗教である。現在、インド国民の大部分はヒンズー教徒で、インド連邦を中心にアジア各地に約三億の信徒がいる。インドの独立以来、パキスタンに分離したイスラム教徒との確執が続いている。

ヒンズー教には開祖がない。長い歴史のなかで、教義、儀式などが形成されてきた。したがって教義も確定しておらず、宗派によって教義の説き方もことなっている。ヒンズー教が確立したのは紀元前四世紀のマウリヤ王朝のころとされているが、盛んになったのは紀元四世紀のグプタ王朝になって、バラモン教が国教として採用されるにおよんで、はじめ下層階級のあいだに信奉されていたヒンズー教も、しだいに上層階級の支持を

うけて、社会的にも大きな力をもつようになってからである。次いで紀元八・九世紀の諸王朝分立時代には新聖典の編纂が行なわれたりして、ヒンズー教は一段と興隆した。一二世紀後半にはイスラムのインド侵入があって、ヒンズー教はイスラムの影響をうけるようになり、さらに一九世紀以後にはキリスト教の影響もうけるようになった。

ヒンズー教では多数の神を認めているが、そのなかで主要な神とされているのがシヴァとヴィシュヌである。シヴァは狂暴でおそろしい神性をもつ山の住人である。必殺の強弓を手にし、虎皮をまとい、山野を荒らしまわり、熱病、咳毒をもって人畜を襲う。しかし彼は幸福吉祥の神ともなる。人々は彼を恐れ、ただなだめることによって、恵みにあずかろうとした。ヴィシュヌはもと太陽の光明作用を神格化したもので、広大な慈悲神とされ救世を目的としている。巨大な若人として表わされ、三歩をもって天・空・地の三界を濶歩し、初めの二歩は人間の視野のうちにあるが、第三歩は最高天にあり、そこでは諸神および祖霊が住して福楽を享受し、甘露の泉が湧くと説かれている。なお神話のなかに出てくるクリシュナはヴィシュヌの化身といわれている。ヒンズー教ではこのように破壊神としてのシヴァ、存続神としてのヴィシュヌ、さらに創造神としてのブラフマンの三神が崇拝の対象となっている。そしてこの創造、存続、破壊の過程をこの世が繰り返し、それぞれの時代にこれらの神々が姿を変えて出現するという輪廻の思想が説かれている。そしてこの輪廻の状態からの解脱が究極の理想とされ、ヨーガといわれる精神修練を実践することによって、解脱が得られるとされている。またヒンズー教には霊魂不滅の思想がある。ヒンズー教の聖典としては、ベーダのほかに、マハーバーラタとラーマーヤナの二大叙事詩があり、さらにプラーナやバガバッド・ギーターなどがある。

ヒンズー教は現在、ヴィシュヌを主神とあおぐヴィシュヌ派、シヴァを主神とあおぐシヴァ派、ドゥルガー女神を崇拝するシャクティ派に大別されるが、その他にも多くの諸派がある。これは主として僧職者に関する区別からきているが、これらの宗派が互いに対立したりすることはなく、またヒンズー教は他の宗教とも反目したりすることはない。一般の民衆も、これらの区別をさほど意識していない。同一の寺院に神々の像が雑然として祭られている。参詣する者も、これらの像を片端から拝む姿が見られる。

ヒンズー教は原始宗教の自然崇拝に見られるような自然力を擬人化した多神論を基本にしており、輪廻思想や霊魂不滅思想も因果の道理を無視した観念的なものであり、またその実践方法も人間性を抑圧するような、低いものである。とくに輪廻思想によって根拠づけられたカースト制度の固定化は、インド人を無気力にし、動きのとれない低迷した社会をつくりだして、インド社会の近代化をはばみ、インドを現代文明から大きく取り残させることになった決定的な要因となっている。

【演繹法と帰納法】

演繹法とは、あらかじめ知られている普遍的法則から特殊的法則を導き出す方法のことである。数学、論理学、哲学などの論証的学問がこの方法を使用する。これに対して帰納法は自然科学、社会科学のような実証的学問で主として使われる。

演繹法は演繹的推理ともいい、二つの意味がある。第一は形式的推理と同じ意味で使われるもので、与えら

れた判断または幾つかの判断を経験にたよらず、もっぱら論理の法則に基づいて結合することによって、その中に直接間接に含まれる判断を抽出する推理方法である。すなわち判断の事実内容を抽象して判断の形式または判断結合の形式に目をつけ、そこから必然的に結論を導く場合の推理方法のことである。三段論法がその代表的なものである。第二は冒頭のように、普遍的法則から特殊的法則を導き出す推理方法であるが、これは形式的推理の一部と考えられる。一般に演繹法という場合は、この第二の意味に使われることが多い。

帰納法とは、特殊なあるいは具体的な事実から出発して、普遍的法則を導き出す推理方法のことである。そのうち、すべての事例をあげて結論を導く完全帰納法と、いくつかの例をあげて全体を類推し、結果を導く不完全帰納法の二つがあるが、前者は既知の知識を一括する点で意味があるが、帰納の本来の意義は、既知の比較的少数な特殊の事例から一般的法則を導くところにある。したがって後者には推理の上で飛躍があり、蓋然的であり、誤謬に落ち込む危険が多い。しかし前者の方法が困難もしくは不可能であることから、後者のほうが実際的方法であるといえる。ジョン・スチュアート・ミル（西紀一八〇六年～一八七三年）はこの飛躍を許すための根拠として自然の斉一性（自然は同じ事情のもとでは同じ現象をおこすような統一された秩序を保っているという公理）を提唱した。たとえば個々の人間が死ぬことを観察して、人は必ず死ぬものであるという法則を導いたとき、これはすべての人を観察するわけにはいかないから不完全帰納法であるが、この場合も自然の斉一性という公理によってそれに根拠が与えられるのである。そのほか帰納法の一つに幾何学的帰納法、数学的帰納法がある。

演繹法と帰納法とを結合することによって、真理の把握がより正確になるとの考え方が、十九世紀ジョン・

スチュアート・ミルによって行なわれた。これは仮説が直接に検証できず、ただ間接的にしか検証できない場合や、知られている種々の法則を、それより包括的な法則の下に統一し組織づけようとする場合に用いられる。そのため、観察した事実によって仮定されるものを仮設として立て、その仮設から論理的に結果を演繹し、その結果が現実と合致するかどうかをみて法則を確立するのである。これは演繹的帰納法と呼ばれる。

古代ギリシャ哲学では、アリストテレスが帰納法的であるのに対して、プラトンは演繹法的である。中世ヨーロッパでは演繹法的なキリスト教神学が支配的であった。近世では帰納法が主流を占めて自然科学の発展に寄与してきた。その影響をうけて哲学界も英米哲学は帰納的である。半面、ドイツにおいてはヘーゲルなどの演繹哲学が栄えた。

このようにヨーロッパでは演繹、帰納の両派が分けられるが、東洋においても演繹哲学・帰納哲学の二つの流れがある。東洋と西洋とを比較した場合、東洋の方が、より多く演繹的であるといえる。

【性善説と性悪説】

性善説は中国の孟子（前三七二年～前二八九年）が唱えた説で、人間の本性は善であるという孔子（前五五一年～前四七九年）の説を発展させたものである。孟子の公孫丑上によれば、人間の心には徳に向かう四種類の心があると論じている。すなわち、一に惻隠（あわれみ）の心、二に羞悪（不義を恥じ憎む）の心、三に辞譲（へりくだる）の心、四に是非（正を正とし不正を不正とする）の心である。この四つの心が仁・義・礼・

智の徳の根本であるといい、これが誰人にもそなわっているとしたのである。しかし、悪い環境の中に入れば物欲の心が生じ、このような徳に向かう正しい心の判断が欠けて、善性が失われると説いたのである。このように孟子は人間の本性が善そのものであるとしたのではなく、心に善への端（芽ばえ）があり、絶対善に向かってこれを拡充させるために修養を積まなくてはならない、と論じたのである。しかし、唐代宋代の学者になると、人間の本性そのものが絶対善であるとする説が多くなった。孟子以後の儒家思想家においては、性悪説を主張した荀子（前三七二年～前二三〇年頃）だけが例外で、あとは性善説の流れをくんでいる。この性善説は国家権力の強制なしでも、道徳だけで天下が治まるという儒家の政治理念の根拠となった。

性悪説は、荀子が唱えた説で、人間の本性を悪としている。荀子は紀元前三世紀、戦国時代末期に活躍した儒家。「荀子」性悪篇に「人の性は悪、その善なるは偽なり」と述べている。偽は人為、作為の意。荀子は人間の性を悪と断定する根拠を、人間には利己的欲望があるという事実の上に置いた。すなわち人を欲望のままに放置するならば、世の中は争いを生じ、やがて滅びる。ゆえに人は自己を律することにより、性を善に転化しなければならない。その価値判断の基準となるのが礼儀である。礼儀を守り、実践することによって聖人にいたると説く。荀子の考え方は、戦国時代の乱れた世相と彼が無神論者であったことに大きな原因があるといわれている。

荀子は性悪説を孟子の性善説に対抗して説いた。しかし性悪説では、性が悪であるはずの人間がどうして善の行為をするのかについては十分な説明がない。

このように孟子にあっては、人間の欲望を少なくして人間の本性にそなわっている善性を拡充するという道

徳の形成を主張し、荀子にあっては、欲望の大小を問題とせずに、人間の本性は本来欲望をもつものであって、これをよりよく分別するための基準として礼の必要性を説き、善は偽であり、作為であると論じたのである。しかし人間の本性は元来悪とか善とか断定できるものではない。人間の一念には善念も悪念もともにそなわり、この善念・悪念が縁（対境）に応じて顕現し、善行をなしたり、悪行をなしたりするのである。ゆえに対境となるものが大切になるのである。根本の対境とは宗教であり、正法に縁するか、邪法に縁するかによって、人間の本性は善ともなり悪ともなるのである。ゆえに性善・性悪と断定する考え方は道徳律の域を出ない低い哲学にすぎないのである。

【唯物論と唯心論】

身と心、物質と精神のどちらが根本的であるかということが、古来より相容れない哲学上の形態をとってきているのである。すなわち、物質が本質的根源の実体であるという唯物論と、精神が本質的根源の実体であるという唯心論とである。

㈠唯物論――ギリシャのデモクリスト（前四六〇年～前三七〇年）が原子論（アトム論）によって、唯物論を体系づけたのを初めとして、近世の自然科学と共に一切の事象を物質に還元するとか、また、物質的物理的過程として説明できないものはないという人間機械論、または人間の精神作用も、宗教・芸術・倫理・道徳・文化的所産もすべて必然的に物質的、物理的、生理的な過程にしたがって派生する現象であるとして、機械的唯物

論が風靡したのであるが、やがて、カール・マルクス（西紀一八一八年～一八八三年）、フリードリッヒ・エンゲルス（西紀一八二〇年～一八九五年）によって単純な機械論的唯物論を越えた、新しい立ち場が見いだされ、打ち立てられたのが弁証法的唯物論である。

機械的唯物論の誤りは、事物をその生成消滅の過程のうちにおいてとらえることをしないで、ただ事物を静止的にとらえたところにあり、いいかえればそれがまったく、非発展的、非歴史的な見方をとったという点にあったのである。この欠陥を補い発展させた弁証法は、さらに存在の二つの領域、自然および歴史に適用することによって二つの部分に分かれた。すなわち自然弁証法と唯物史観（史的唯物論）となって、広く発展し、ついには共産主義という一大陣営を生むにいたったのである。

要するに唯物論は、単純なものから理論的に高度なものまで、物質の他に何ものも存在しないときめ、認容しない考え方、主義であるが、原因結果の連鎖はすべて物質的であるとするからには、最初の物質はどのようにして生じたのであろうかということが問題になる。またすべてを物質に還元して考える唯物論者自体が、絶対に対象になりえない自己の思考作用そのものをどう処理していくのであろうか。

物質的現象に還元されえないのが意識現象なのであるから、意識現象を物に還元して説明すること自体、対象化された意識現象がすでに意識現象そのものでないことを自証していることになるのである。

(二)唯心論――唯物論に対して理想主義といわれる立ち場におかれるのが唯心論である。

心の働き、精神作用はあくまでも物質に還元されない独自の様相をもったものであるとし、物質的存在が存在として容認されるのは意識がこれを容認するからであり、したがって意識が存在を決定するのであるとする

とき唯心論となるのである。

精神的なもの（霊魂、精神、理性、意志等）こそが本質存在であり根源であって、物質的なものをその現象あるいは仮象とみなす学説。唯心論的立ち場をとる学者は多くにのぼるが、古代のソクラテス、プラトンを初めとして中世のアウグスティヌス、近世においてはロック、ライプニッツ、カント、ヘーゲル、バークレーなどがあげられる。これらの哲学思想はキリスト教とともに西欧をささえてきた理想の灯火であったが、結局、唯心論は観念論であり、理想主義にほかならないのである。「最後の最も若くして最も新しき哲学は、最も発展した、最も豊かにして最も深き哲学である」ことを自ら是認したヘーゲルの哲学であったが、一方に唯物弁証法、また一方に実存哲学を、自らの否定反抗として自らの中より生ぜしめた現実の事態が物語るように、生活、現実から遊離した思弁の哲学は、人間の現実をいかんともしがたく、打開する力もありえず、かえって思弁的理性が現実に屈したということは、唯心論もやはり観念にすぎなかったということにほかならない。

総じて唯物論も唯心論も、共に片寄った一面からの見方であり、考察にとどまったものであるから、根本的問題はその背後に残されたままなのである。

【実存哲学】

いわゆる実存哲学とは、ハイデッガー、ヤスパース、サルトル等によって代表される現代哲学の支配的思潮のが唯心論なのである。

実存哲学の源は、パスカル、キェルケゴール、ニーチェにさかのぼることができるが、十九世紀後半以降、特に第一次世界大戦が与えた深刻な影響を契機として、西欧全土をおおった不安と危機意識は、あらためて、喪失した本来の自由を取り戻そうと、これら先駆者たちの教えを成長させた。

このように、いわば十九世紀来、運命的に西欧精神が体験せざるをえなかった歴史的・社会的苦悩から誕生したのが実存哲学なのである。

もともと実存哲学は、人間主体性の回復を掲げて出発したものである。二千年にわたりヨーロッパ精神史を支配してきたものは、キリスト教であり、またそれまでの主流をなしてきたものは、デカルト、カント、ヘーゲル等の観念論哲学または実証哲学であったが、実存哲学はそれらと対決し、その価値観を逆倒させるものであった。

その主張するところは、「実存」が本質に先立ち、哲学は主体性から出発しなければならないとする主体性中心の哲学である。本質存在や、キリスト教的造物主から人間が規定されるのではなく、人間自身の主体性が真理であり出発点であるとして、思考以前に、まず生存する人間存在を、哲学的関心の中心においたものである。

ハイデッガーは、人間の存在を分析することから過去・現在・未来の時間性を問題としつつ、人間各自が負う歴史的運命の根源に目覚めることを説く。今ここに現にあるように「投げられた」自分は、たんに物のようにではなく、どこまでも世界内に交渉をもつ具体的生存者として、常に同時に、未来に向かって脱自的に己を「投げ企てる」存在である。「投げられた」ということは過去につながり、「投げ企てる」とは未来に関係することであるから、現在は過去的にして同時に未来的である。このような時間性を歴史性として、これを運命

に関係づけて「歴史的運命性の根源」へと、良心の呼び声に聞きしたがって、おのれを脱自的に覚醒せしめるところに実存としての自由がある、というのである。

またヤスパースは「超越者」（神）なる概念を設け、その実在的認知は「哲学的信仰」によって体験されると説き、一方サルトルは、神の存在を否定し、人間は、現にある自己から外に脱出する存在であると説く。

実存哲学は、実証主義に対しては人間存在が物質的なものに還元できないと主張し、観念論に対しては、存在が思惟に優先することを力説することにより、実証主義、観念論をしのいでいるといわれるが、従来の唯物または唯心から脱却したあらたな思索を実在に対して展開した学問上の功績は認められるとしても、直面する人間の危機の現実的な解決ということにおいては、従来の哲学と結局かわりがないといえよう。

結論していうならば、ハイデッガーの「歴史的運命性の根源」も、ヤスパースの「超越者」も、サルトルの「無神論的実存哲学」も、結局は三大秘法の大御本尊即南無妙法蓮華経の大法則を指向しているにほかならないのである。

【プラグマティズム（実用主義）】

実存哲学と並んで、アメリカ、イギリスを中心とした現代の支配的な哲学はプラグマティズムである。これはイギリスの経験主義的な性格を本質にもって、アメリカの土に生まれた独自な哲学である。

行動を思考の上位におき、観念の意味と真理性を行動上の帰結、成果として理解する立ち場である。

これは、南北戦争後のアメリカ資本主義の急速な発展を背景として、従来の絶対的観念論にかわったアメリカ・ブルジョアジーの哲学であるといわれている。

一八七八年、パースが「いかにしてわれわれの思想を明確にしうるか」という論文を発表したのが始まりで、これを受けついで友人のジェームズが一九〇七年に「プラグマティズム」と題する著述をおおやけにして、一躍、世人の注目を集めるようになった。さらにデューイによって、インストルメンタリズム（器具主義）として展開された。そしてシラーの人本主義があらわれ、現在ではシドニー・フックによって大成されようとしている。

実用主義（プラグマティズム）の根本的な立ち場は、われわれの認識が、実際の経験生活のうえで、有用性（利益）を事実証明されたときに、初めてその概念は真である、というところに見られる。つまり、思想・思考・概念など、すべて実際の行為によって実行してみて、初めて価値を有するのであり、真なりと信じることの正否如何は、行動の結果がこれを検証し、判定するのである、とする。いうなれば「論より証拠」という相対主義的・経験主義的・実証主義的な、科学実験至上主義にほかならない。

ところで科学・実験の方法は、常に仮定から出発して、その仮定が真なりと断定されるまでに、できるだけの実験操作を繰り返して帰納的に結論を得、その得た結論をもう一度仮定として演繹を試み、普遍妥当性を確めて真偽を断定する——ちょうどそのように、社会・政治・経済などすべてにわたって、機械論的な独断や決定論をあくまで否定し、社会科学の法則にも誤謬のひそむ可能性を肯定して、一度誤りが発見されれば、ただちに仮定に帰って再吟味をしなおす用意をもっていなくてはならない、というのである。かくして、個人の意

見は絶対ではなく、常に仮定として公論により採択が決せられねばならないとして、民主的個人主義の倫理が基調になる。

デューイは、これを社会的教育的関心に結びつけ、思考のもたらす概念は、われわれの行動経験を一定の実践目的を満足せしめ成功させるための「道具」にほかならないとして、知性の社会変革的意義にゆきつこうと試みた。

プラグマティズムはたしかに結果を重んじ実生活に直接に結びついているという点で、いままでにない新しい哲学であるといえる。いかにもアメカ的合理主義ともいうべきものである。しかし、所詮、資本主義社会の実際上の必要が生んだ哲学である以上、全人類に幸福をもたらすとはいい得ないし、ましてや永久不変の指導原理であるとはいえまい。

【唯物弁証法】

唯物論を土台として立てられたマルクス主義の弁証法をいうのであり、ヘーゲル流の観念論的弁証法に対するものである。弁証法、弁証法的唯物論ともいわれる。

弁証法は、ギリシャ語からでた語義であり、本来は対話・問答の技術を意味するものであったが、これを事物の発展に、論理として、体系的に確立したのがヘーゲルであった。ヘーゲルは自然、歴史、精神の全世界が、不断の運動、変化、発展のうちにあることを示し、それら運動、発展の内的な連関を明らかにすることを

試みたが、それは概念またはイデーの自己発展（弁証法）であり、現実の世界の過程は、この世界創造以前の絶対者（イデー）の模写とされるのである。こうしたヘーゲルの観念論的弁証法に、弁証法的唯物論は根本的に相対立するのである。

「ヘーゲルにとっては、彼がイデーの名のもとに独立の主体にまでも変えている思考過程が、現実的なものの造物主である……。私（マルクス）にとっては、その反対に、観念的なものは、人間の頭脳に置き換えられ翻訳された物質的なものにほかならない」（マルクス）

すなわち、観念的立ち場に立って、真に存在するものは物質ではなく、抽象的な概念またはイデーであるとするヘーゲルに対して、マルクス、エンゲルスは、フォイエルバッハ（ドイツの唯物論者）の唯物論の非弁証法的な性格と、ヘーゲルの観念的な弁証法の形態を批判して、弁証法的唯物論を樹立したのである。

それによれば、世界の本質は自ら運動し、発展する物質であるとし、意識（思考）はその一つの発展段階としての特定としての有機的物質（脳髄）の所産であり、認識とは、人間の実践を介しての物質の忠実な模写の過程以外のなにものでもない。世界は、この認識活動をも含めて相互に連関する種々の過程の統一であり、矛盾をはらみ質的な飛躍を考えてのうえから、低次のものから高次なものへ進む無限な発展過程であるとされる。

このようにして、弁証法的唯物論は、唯物論的立ち場に立っていっさいの存在を考察し、そこに弁証法的構造、すなわち矛盾とその統一という基本的な構造を見つけだそうとするものであるが、さらに、それは人間社会の歴史に適用されて、史的唯物論または唯物史観として展開されるのである。上部・下部構造、生産力と生

産関係の矛盾による社会の変化という思想がそこで論じられ、社会革命が行われるといわれている。この社会革命はつねに被支配階級に対する闘争という形で行われるというところから、ここに歴史は「階級闘争の歴史」（「共産党宣言」）であるという。

すでに第四節「唯物論と唯心論」の項で述べたように、唯物弁証法は、ひじょうに論理的であり、一面の真理を述べたものであるが、唯物論を根底におくかぎり、偏した哲学であるといわざるを得ないのである。

【科学と宗教】

はじめに科学について、次に宗教について考察し、最後に両者の関係を示そう。

さて一般に「科学」というと、広い意味で「学問」（社会科学、人文科学、自然科学）と同義に用いられる場合と、狭い意味で「自然科学」をさす場合とがあるが、いまは、後者の意味に限定して用いることとする。

科学は物質を対象とした学問であり、外界のさまざまな現象・事物を観察・調査・研究することにより、そこに相互の因果関係を追究し、一つの法則を見いだそうとする。さらにその法則から推論し、新しい分野の研究が進められているのである。

あらゆる学問は、人類に貢献し、幸福をもたらすことを究極の目的としている。それを逸脱したものは、およそ無意味である。そうである以上、科学もまた、物質面から、人類に幸福をもたらすものである。事実、科学の進歩は、めざましいものがあり、人類に多大の利益をもたらしている。交通通信機関の発達、医学の進

歩、原子力の応用等、目を見はるものがある。

しかし他方では、戦争を大規模にし、核兵器等を生み出して、為政者に利用されて現代の危機のもとにもなっているのである。

かように、自然科学の発達は、一方においては文化の向上に寄与し、生活に便宜を与えているが、他面では大きな不幸の原因にもなっているのである。

一部に科学万能主義をいうものがいるが、それは科学を知らない浅はかな考えであり、科学の世界を知れば知るほど、そこにはおのずからなる限界があるのを知るのである。

次に、宗教はどうであろうか。

科学が物質を対象としているのに対し、宗教は生命を対象としているといえる。あらゆる宗教は、死を論じ、死後の生命を述べて、生命の問題にふれているのである。生命こそ最も本源的なものであり、あらゆる文化、あらゆる生活の根底をなすものである。ゆえに生命をあつかっている宗教こそ、あらゆる文化、あらゆる生活の根本となるべきものなのである。

さて次に科学と宗教の関係であるが、以上でわかるように、この両者の本質を見きわめた時、この両者は決して対立するものでもなければ相争うものでもなく、またたがいに矛盾してはならないのである。逆にいえば、科学と矛盾する宗教は、誤った、低級な宗教であるといえる。西欧における科学と宗教の論争、マルクスの「宗教はアヘンなり」の言葉、これはいずれもその宗教がキリスト教という低級な宗教であったことから起こった当然な結果であった。

高度の科学研究者のなかには、宗教を肯定する人が少なくない。たとえば、今はなき二十世紀の偉大なる科学者アインシュタインも、キリスト教を否定しつつも、真の宗教という表現のもとに、偉大なる宗教の出現を渇望している。日本の湯川博士も、人間の知能、科学の限界を述べ「叡知の源泉となる宗教」という表現のもとに、新しい宗教の出現を望んでいるのである。

真の宗教は科学と矛盾しないだけでなく、科学を指導するものである。その点を述べれば、科学は実験を重んずるが、それは無方向、無秩序にするのではなく、一定の方向と秩序をもって実験するのである。また、実験のデータから一つの結論を導き出すにも、推論の段階において、実験者の思想が無意識のうちにもはいりこむのである。たとえば、オパーリンの生命観にしても、弁証法的唯物論がその根底になっており、実験する場合の方向と秩序を与えているのも、また実験のデータから推論する場合も、弁証法的唯物論が大きく左右しているのである。このように、科学に方向と力を与えているのが思想であり、哲学である。アリストテレスが「哲学を科学一般を成立せしめる土台」として、形而上学と呼んだのも、このことを示しているといえよう。真の宗教は、生命を対象とした偉大なる哲学である以上、科学に偉大なる力と方向とを与えるものである。

また、科学は、宗教の一分野である。物そのものの探究、また変化現象は、宇宙のすがたの一断面である。したがって、科学の世界は部分観である。宗教は経文に「如来は如実に三界の相を知見す」とあるように、全体観に立っている以上、科学は宗教の一分野である。

しかして、科学と宗教の真実の関係性について、池田会長の論文の一節を左に引用する。

「科学をリードする宗教は、とうぜん科学性を、その内に包含していなければならない。さらに、科学をはる

かに凌駕し、科学を支えるべき人間生命自体に光明をさしこむ高次の宗教でなくてはならない。この条件に適合するものこそ、三千年来、東洋人の生命の底流となって流れ来たった大乗仏法の真髄であると、私どもは、日夜主張しつづけているのである。

もともと、西洋の科学は、自然を人間生命と分離、隔絶して、そこに貫かれている因果の理法を追究してきた。そして、その分野で、多大の成果をもたらしてきたことは事実である。しかし、それは宇宙、自然のある側面の因果の追究であって、けっして全体ではない。ある科学者が指摘しているように『真理を生み出す何億という鼓動のうちの、まったく小さな一つの脈搏』にすぎないのである。

それに対し、仏法は初めから人間と自然を密接不可分なものと論じ、人間生命に内在する因果の理性を説き顕わし、さらに、人間と自然を貫く因果の理法を体系づけているのである。

すなわち、科学は自然現象を対象とし、因果律を追究する学問であるのに対し、仏法は生命を対象とし、その内面的な因果律を把握した哲学である。その方法論において、一方は分析的、帰納的であり、他方は、総合的、演繹的であるが、その究極において、両者は絶対に矛盾するものではない。

生命の問題は、東洋では遠く三千年前に、インドの釈尊が説き明かし、近くは日本に出現した日蓮大聖人が、より本源的に究明しきっている。戸田前会長は『科学が進歩すればするほど日蓮大聖人の仏法の正しさが証明されるであろう』と述べたが、このことばは、もっとも優れた宗教と科学の関係を示すものとして、時とともに輝きを増していくことであろう」（科学と宗教より）

その真の宗教とは何か。それはいうまでもなく日蓮正宗である。

【価値論】

1　真理と価値

真理とは千差万別の対象の中から一様平等の共通相・普遍相を見いだすものであり、価値とは対象の内部に潜んでいるそれ自体の個別相・特殊性が社会および吾人の生命にいかなる関係を持つかの判断である。

真理の概念は如実に表現した実在の概念で〝あるがまま〟を如実に説明したものが真理である。人生との関係がどうあろうとも真理である。

価値とは対象と人間との間における力的関係性であり、吸引するか反発するかの情的関係性である。

このように真理と価値とはまったくその性質が異なる。さらに両者の本質的な相違をあげれば、次のようになる。

一、真理は創造することはできない。ただ自然にあるがままをわれわれが見いだすだけである。これに反し価値は創造しうる。また見いだされる価値もある。われわれが日常生活に使っている物質の多くは、初め人生との関係がない物であっても、しだいにその有用性が発見され改良・進歩を加えて生活必需物資となったものである。

二、真偽と好悪とは関係がない。人はある時に真を好みある時に偽を好む。真偽は個人の感情とは関係なく、ある判断が普遍妥当性をもつか否かで判定されるものである。これに反し人間は誰でも美利善を好

み、反対の醜害悪を嫌う。これが人間の本性である。

三、真理は不変であり、価値は変化する。真理とは対象の偶然的な要素を捨て、不変の本質を抽象して如実に表現したものである。しかるに価値は対象と評価主体との間に生ずる関係力であるから、一方かあるいは双方の事情が変化するにつれて吸引か反発かの力の量も質も変化するのは当然である。

四、認識作用にあっては真か偽かそれ以外にない。評価作用は量的判断であるから不幸と幸福のように無数の段階がある。

2　認識と評価

対象が主観を感動させた量――すなわち対象と我との力的関係性を意識することが評価であり、対象が主観に映じた印象を補足するのが認識作用である。すなわち認識は客観的であり、評価は主観的である。

「これは馬である」という表現があり、眼前のその動物が牛でも羊でもなくて、世間一般に承認されている「馬」という概念と一致するならばその表現は真であり、しからざる時を偽という。認識とはこのような客観的な標準があり、それに当てはめて有か無か同か異かを確めて判定する。ゆえに何人が見ても真偽・正邪の異なった判定はないはずで、真理はただ一つである。

実際にその馬を見て美か醜かを感じ、あるいは自分の生活に利か害かを生ずるその関係性の判断が評価作用である。すなわち評価は主観的な気分や個人個人の生活状態に支配されて、客観的な標準は成り立たない。もしその関係性について客観的な標準や、普遍妥当な法則が判定されるならば、それは評価ではなくて認識であり、真か偽かと判断されるべきである。

認識の対象は主観の生命に対して直接の関係がないか、または軽微な関係しかもっていない。したがって認識主体はこれに対して冷静にそのなり行きを眺めて客観するにとどまる。これに反し評価の対象は主観の生命に何らかの反応をもつ現象である。したがって評価主体は知的な冷静な態度でいることなく、より強い感情的主観的反応をもつものである。

このように両作用はまったく異質の精神作用である。われわれの日常生活にあっては、認識して評価する場合と、評価してから認識する場合がある。認識のない評価は付和雷同的なものであり、また食わず嫌いや盲信などもこれである。また評価のない認識は対岸の火事であり、生活に直接実証されない学問などもこれである。

認識と評価が混乱する弊害は日常生活に多くある。

一、けんか両成敗という素朴な裁き方がこれである。

一、間違ってまったく他人に仇討ちすること。

「これは何ですか」と質問する時に、「そんなことが判らないのか、バカなやつだ」というように答えたとする。質問者は何であるかの認識を求めているのに、答える者は質問者の人格を評価しているので、これでは答えにならない。このような例は学校にあっても、社会にあっても、家庭にあっても実によくあることで、社会の混乱は実にこの認識と評価の混乱から起こっている。

3　真善美の矛盾

従来の哲学では人間の理想として真善美を立ててきた。しかしよく思索するならば真理は価値でない。また真偽は人間の好き嫌いとは別個に判定されるべき概念であることは前述のとおりである。

なるほどうそをいう人間は嫌われる。しかし、その場合に嫌うものは、相手の人格を嫌うのであって、いわれているうその事実を嫌うのではない。

また真善美を理想とすることは、われわれの生活に最も必要な最も切実な利の価値を除外していることに重大な欠陥がある。哲学や学問が観念の遊戯となり空論となって生活から遊離する原因がここにあるのである。

4　利善美の意味

価値という語が最も早く用いられていたのは経済的な意味においてであろう。価値があるということは、すなわち欲望充足の対象とするにたるということである。しからばその価値の内容となるものは何か。美醜・利害・善悪の三要素である。

美の価値とは目・鼻・耳・口・皮膚のいわゆる五官によって獲得する感覚的・一時的価値である。すなわちわれわれの感情を一時的にもせよ楽しませるのが美の価値であり、これに反するを醜という。

利の価値とは吾人の生命を維持発展するにたる対象との関係状態であり、これに反するを害という。美醜が感覚的一時的なるのに比して利害は全身的永久的の価値である。

善の価値とは各個人が要素となって統一されている社会の、生成発展に寄与する人間の有意的行為をいう。すなわち人間の働きのうち、公益を善といい、公害を悪という。

善悪は社会を評価主体として、利害は個人を評価主体とする。ゆえに社会に対して害を加える個人の行為は、個人には利であっても善ではありえない。また一つの社会に善の行為も、これと対立する他の社会では善として通用せずかえって悪と判定される場合もある。この場合に国家と国家との対立のごときは、あたかも個

人と個人の対立のように利害で判定されるのである。

以上を図示すれば、

一、個人的価値
　　感覚的一時的価値――美醜
　　全身的永久的価値――利害

二、社会的価値――――――善悪

5　宗教の価値判定

日常生活の中で価値を問題にする時には、「何でもよい」ということは全然ありえない。必ずAよりもB、BよりもCというように価値のより高いものを求めるのが当然である。学問として知識として知っておく程度のものなら、「何でもよい」のである。

八百屋の店頭にたくさんの果物がならんでいる。それをただ眺めているなら何でもよいのである。しかし実際に自分が買うとすれば、安くて良い物で、しかも自分が今いちばん食べたいと思う物を買うにきまっている。このように生活は価値を求めている。

宗教といえども生活と無関係であるわけがない。実際に自分が信仰すればその教えの是非・善悪がただちに生活の上に現われてくるのである。

ゆえに宗教にも価値の大小・浅深があるのは当然である。イワシの頭でもキツネでも孔子の教えでも釈尊の教えでも、同じだと考えるのは、よほど頭の狂っている証拠ではないか。

6　目的観の確立

何事をなすにも目的を確立してかからなければ盲動となり、闇中模索となる。現代の世間ではことごとく目的観がない。もし目的があるとしても、それは眼前の小目的であって大目的がないからすぐ行き詰まってしまう。学生は学校を卒業すれば何とかなるだろうと思っている。貧乏人は金さえ持てたらよいと思っている。そのような目的はすべて小目的であり、人生最大の目的に対すれば手段となるのである。

目的観の確立にはまず幸福の内容をはっきりつかまなければならない。人間は誰でも幸福を求めている。しかして幸福の内容は価値であり、美と利と善であってそれ以外にはない。ゆえに最高最上の美と利と善を獲得するのが人生最高の目的である。名誉・地位・財産等はその一部分であり一要素である。

このように最大の価値を獲得するために自己の生命の実体を知り、生命の力を知る必要がある。このために正しい宗教がなくて真の幸福は考えられないのである。